

ASEV Japan 10周年に際して

第3代会長 廣 保 正

1984年のよく晴れた秋の日、都市センターの会議室での準備会が、昨日のように思いだされます。この10年の間会員の皆様のご協力、会長はじめ役員の方々のご苦勞、とくに横塚エクゼクティブ・ディレクターのご尽力でこのように発展したこと、心からお喜び申し上げます。

今年の賀状の中に「甲州ブドウが安値に泣いています。国産原料ブドウを確保したいとの県内メーカーの要請で増殖した甲州は、900ha までになりました。(中略)すでに75%が輸入原料国産ワインでしたから、近く100%輸入原料国産ワインになるでしょう。」という栽培の研究・指導をなさっていた方がありました。わが国ではワインとブドウの研究者、技術者が一堂で討論できるような学会は、無いと言ってもよい状態でしたので、ブドウ・ワイン学アメリカ学会の日本部会が、そのような場になることを願っておりました。しかし、教育組織の違いもあってか、栽培の方が少なく、残念に思います。ブドウ栽培、ワイン生産の方が一堂で論じておれば、先程のような賀状はなくなるし、少なくとも表現はかなり変わっていたように思います。わが国の農業の本質的なこともあって簡単でないと思いますが、ご関係の方の一層のご協力をお願いいたします。

学会活動は、講演会と雑誌の発行に代表されると思います。講演会は、11月下旬に開催され、要旨はAJEVの2号に掲載されてはおりますが、文献にするためにはAJEVに投稿、採用される必要があります。また発表した仕事を早くまとめておきたいということもありましょうし、和文誌の要望は強かったように思います。片手間に定期的にだすということは並大抵のことではありませんし、親学会とのこともありましたので、手をつけられなかったのが実状でしょう。横塚エクゼクティブ・ディレクターの親学会との交渉、編集長はじめ委員の方々はもちろんですが、米虫編集幹事のご努力によって「ASEV JAPAN REPORTS」として1990年(平成2年)の1月に創刊号がだされ、号を重ねる毎に充実してきて、ご苦勞に感謝しております。

また、ASEV Japanは、ブドウを栽培しワインをつくるという生産現場とワインという商品も研究の対象ですので、生産現場の課題、商品学的課題と基礎的研究との関連は重要なことだと思います。これまで以上にこの学会が、ワイン産業への寄与ということを忘れない学会として発展して欲しいと願っております。そのことが基礎的研究の内容もより豊かなものとして充実すると考えております。

一層の発展を祈ります。

(千葉大学 名誉教授)